

寂聴と須賀子——『遠い声』私感

米本 浩二

管野須賀子（一八八一―一九一一）は大逆事件で幸徳秋水らと一緒に絞首刑となった革命家だ。管野スガ、と表記される場合がある。戸籍は「スガ」なのだが、彼女は一貫して「須賀子」と署名した。友人・知人間でも「須賀子」である。

瀬戸内寂聴『遠い声』（一九七〇年）は須賀子の生涯を描く。一九六八年三―十二月、『思想の科学』に連載。当時タブーだった須賀子に敢然と取り組んだ。いまは『遠い声 管野須賀子』（岩波現代文庫）が出ている。

須賀子は二二歳で『大阪朝報』、二五歳で『牟婁新報』記者となる。二六歳、同紙編集長。退職後は平民社支援をへて幸徳らの同志となった。両紙を含め『明星』『基督教

世界』などの雑誌に社会批評約一五〇本、小説一九作、詩・短歌六編などを書いた。「女性記者の先駆者」「圧制からの解放を願う小説や評論の書き手」として高く評価すべき人であるが、悲運の革命家の印象が圧倒的なため、他の業績は隠れがちだ。

獄中手記『死出の道^{みち}』が知られている。清水卯之助編『管野須賀子全集2』（弘隆社）に全文が収められている。全二八頁。須賀子は、大逆事件の首謀者として検挙され、一九一一年一月一八日に死刑判決が出て、七日後の二五日に処刑された。一月一八日から二四日までを日記形式でつづる。

「死刑の宣告を受けし今日より絞首台に上るまでの己れを飾らず偽らず自ら欺かず極めて率直に記し置かんとする

ものなれ」の序文がついている。「己れを飾らず偽らず自ら欺かず」は須賀子を論じるとき、しばしば引用される。

判決に「満身の血は一時に嚇と火の様に燃えた。弱い肉はブルブル慄えた」(二八日)と憤慨した須賀子。「今回の犠牲は決して無益でない、必ず何等かの意義ある事を確信して居る」(一九日)。「ああ人生は夢である。時は暮である」(二〇日)と思いは無常にゆく。「私は私自身を欺かずに生を終ればよいのである」(二二日)。

寂聴は『死出の道艸』を小説の中心に据える。一人称「私」は須賀子だ。「女はただ書かれる素材ではない」「女はものごとを動かす主体なのだ」という寂聴の強い意志をかんじらる。語り手が須賀子なのは、『死出の道艸』の記述を「私」のナマの言葉として使うための方法でもあらう。

『死出の道艸』をベースに、処刑前の一週間をクローズアップする書き方は、苦行に近いものがあつたと察せられる。小説のシーンを監獄内に絞るとしても、なぜ入獄したか、荒畑寒村、幸徳秋水らとの恋の顛末、不遇の未成年時代など、遡る記述がどうしても必要だ。小説は時系列に頼ることになる。

しかし、生の帰結が『死出の道艸』ということになって

しまうと、『死出の道艸』がかすむのである。「私はこうやって生きてきました」式の記述は、どうしても、人間の思いを引きずる。細部を書き込めば書き込むほど、生と死のデュアな言語空間『死出の道艸』の求心力というべきものが失われる。その矛盾をどうやって克服するか。

いつ処刑されるかわからぬ極限状況が『死出の道艸』の自律性を保つたと私は考える。日がたつにつれて(死が迫るにつれて)、過去が消えてゆく。死と向かい合う現在性が小説を支配する。そうなると「私」は須賀子であり寂聴であり読者である。ラストシーン。すっかり夾雑物を排して、あとは飛ぶだけだ。

「すぐすむよ」／秋水が私にささやく。首に冷たいものがまきつく。細い蛇のような感触。軀が宙に飛ぶ。虹が廻る。無数の虹が交錯して渦を巻く。秋水と飛ぶ。ふたり抱きあって、強く。更に高く虹を負って飛ぶ(『遠い声』)。須賀子の鮮烈な部分を寂聴は鮮烈なまま文字にした。しかし、語りえないものもある。せつかく突破口を開いてくれたのだ。「女性記者の先駆者」「圧制からの解放を願う小説や評論の書き手」という須賀子の隠れた業績に思いをはせるのも、あとにつづく者のつとめだろう。